《目覚めの音》
形而上的に「人」を描くためのシュルレアリスム表現の活用の研究

《Awakening sound》

Study of the Use of Surrealist Expressions to depict “Man” metaphysically

中野　琴音
Kotone NAKANO

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University

《目覚めの音》キャンバス　油彩　2,273 × 1,818（mm）

本稿は、人の心の奥底に潜む無意識の感情や思考、性格、記憶、意識と言った内面世界を、形而上的なシュルレアリスム表現によって表現することに試みた修了研究について述べたものである。

稿者は、中学生時代から怪談や神話、宗教に触れることで、「見えないもの」や「現実ではあり得ないもの」に対して強い関心を抱いてきた。多くの人は、それらの中で語られる超常現象を現実には「ありえない」と思うであろうが、それらの現象には必ず「誰か」が考え出した「秘められたメッセージ」が込められていると稿者は考えている。それは人間の奥底に眠る、美の根源である無意識の世界から発せられたものであるように思われる。1924 年以降、美の根源を追求した運動があった。つまりシュルレアリスム運動である。シュルレアリスムとは、フロイトの精神分析を基に、詩や文学、絵画という多様な分野において、人間の無意識にある美の根源を見い出し、「現実を超える現実」を表現して、真の自由を獲得しようとする運動であった。

修了研究作品は、大学院一年時に描いた《エスケープ》のリメイク作品である。現実世界に馴染めず、苦しみから逃避したいという自身の精神状態を表現したものである。風船と制服で表現しているが「自身」、そして烏によって表現しているのが、いずれ必ず訪れる自然の摂理の様な現実の訪れ、すなわち「環境」である。

第 1 章では、学部生時代から大学院一年次までの過去作品によって、稿者がシュルレアリスム的表現に至るまでの経緯について述べるとともに、大学院一年次で視野を広げ、研究テーマを深く掘り下げるために受講した現代思想の授業で「ミメーシス論」や「鏡像論」、「崇高論」について学び、それらを基に「環境」と「自分」というキーワードを見い出したこと、「現実」に存在するあらゆる要素が内面世界に影響を与えていることを改めて認識し、この学びを修了研究作品と研究テーマに反映させたことについて述べた。

続いて第 2 章では、大学院一年次の作品《エスケープ》を修了研究作品としてリメイクした経緯について述べるとともに、修了研究作品の制作に際し、伝えたい情報や、構図とコンセプトをシンプルにし、非現実でありながらもリアリティーを持たせるために、本物のモティーフや写真を用意し、実際に触れて感触や温度を確かめることを重視して制作したことについた述べた。

そして最後に、シュルレアリスム表現を追求した修了研究作品を制作したことで得られたことや、新たな発見、将来における活用、そして「美の根源」に近づけたか否かや反省点について述べた。